東方怪奇談

東方サイコー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方怪奇談

【Ｎコード】

Ｎ７５９７Ｗ

【作者名】

東方サイコー

【あらすじ】

ある日４人の男子が幻想入りしてきた。今日から始まる弾幕飛び交う幻想郷ライフ。４人の男子がどう生活していくのかこうご期待。

＊この作品には、作者の勝手な設定が含まれています。苦手な方は、バックをお勧めいたします。

オリキャラ紹介と注意（前書き）

三つ目の小説です。最初なので、大まかなストーリー紹介と、オリキャラの説明です。

オリキャラ紹介と注意

初めに、この小説は東方の二次創作小説です。そのため、作者の勝手な表現が混ざっている場合が数多く存在します。そのため、ちょっとそれは・・・という方には、今すぐにでもバックをお勧めいたします。また、作者の精神状態によってグロさの表現が変わるということもあるかもしれません。

では、ちょっとしたストーリーの紹介です。外の世界から4人の男子が妖怪となって幻想入りするという話です。ストーリーぐちゃぐちゃです。

それでは、その4人のキャラ設定です。（オリキャラです。）

名前：明石（あかいし）　佑也（ゆうや）
種族：人間→妖怪
能力：空間を操る程度の能力
武器：奇剣「エルオス」
説明：まぁ、この小説の主人公。性格は、明るいが少しお馬鹿な一面もw武器は、今は語るまいw

名前：三竹（みたけ）　達也（たつや）
種族：人間→妖怪
能力：重力を操る程度の能力
武器：ナイフ
説明：明石佑也の友達であり、かなりのゲーマー。すでに、東方もプレイ済み。

名前：折原（おりはら）　優末（ゆうま）
種族：人間→仙人

能力：霊力を扱う程度の能力、兵器を創造する程度の能力
武器：兵器全般
説明：明石佑也の友達。天才的な頭脳を持つ。兵器にも詳しい。

名前：霧夜　創
種族：人間→半妖（半分人間、半分吸血鬼）
能力：妖力で盾を創造する程度の能力
武器：魔弓「キンディル」
説明：片目が赤い。明石の友達。能力がとにかくチートのキャラ。
武器の名前？適当だーｗｏｒｚ

オリキャラ紹介と注意（後書き）

どうでしたでしょうか？誤字などありましたら、がんがん指導してくださいお願いします。また、不定期更新です。

幻想入りですかそうですか。（前書き）

はい。オリキャラたちが幻想入りです。ストーリー？気にしたら負けですよw

幻想入りですかそうですか。

うん。とりあえず、どうしてこうなった。明石佑也は、一面に広がる草むらの中で考えていた。「自分は、どうしてここにいる？」と。

それは、数時間前のことだった。部屋で友達とＰＣでボイスチャットを楽しんでいたところ、いきなり心臓が痛くなりそのままバタン。はい終了！のはずが、明るい空間になぜか浮いていた。そして、どこからともなく

「ゴメーン！キミ別人だった。お詫びに、妖怪に転生ということで生き返らせてあげるから。何か希望ある？」

とまるで心の中に話かけるようにして聞かれた。明石は、聞かれたら返すのが筋だと思って

「別に希望は、ないですよ」

と答えた。

「そう？なら普通の妖怪ということで！あ、それと後、キミの友達も後から送るから。それじゃ」

「いやいや。てか、名前教えろｗ」

「あ、でも、名を聞くときは、自分から、だよ？」

「はいはい。俺の名前は、明石佑也だ。あんたは？」

「まぁ、神とでも名乗っておこうかな。実際そうだし。じゃ、ばいばい」

「えっちょ、待てよ。オイ～」

明石佑也の叫びは、去っていく神には、届かなかった。

はい。回想終了！
うん。まったく状況がつかめないやw
明石佑也が考えて状況を何とか把握しようとしていたら佑也の頭上に穴が開き中から3人の人影が落ちてきた。もちろん佑也は、不意打ちを食らったがごとくつぶされた。「グエ」
「いたたたた」裕也の上に乗っかっている3人が同時につぶやく。
「いや、それ俺の台詞だから。さっさと降りろ！達也、優末、創」
「あれ？どうして名前を？て！」
3人が下を見てみると自分達の友達であった。3人は、「うぉ！」と素っ頓狂な声を上げて飛びのいた。
「まったく」とつぶやきながら立ち上がり、服についた埃をはらった。
こうして4人の幻想入りは、幕を上げたのだった。

幻想入りですかそうですか。（後書き）

どうでしたでしょうか？誤字などありましたら指導お願いします。次回は、早速戦闘シーンです。正直いうと、うまくあらわせるか分かりません。アドバイスもらえるとうれしいです。

戦闘ですか、そうですか。（前書き）

前回は、どうでしたでしょうか？では、３話をどうぞ。

戦闘ですか、そうですか。

「う～ん。これからどうするか？」
「う～ん。」
４人は、迷っていた。見知らぬ地にいきなり放り出された揚句に、どこに向かって進めばいいのかも分からないという普通に考えれば「終わっている」と思える状況だった。
「う～ん。まぁ、適当にあるい「それは、危険よ？」・・・え？」いきなり声が聞こえ振り返ると、そこにはたくさんの目がある隙間から身を乗り出し口元を扇子で隠している女性だった。
「（うん？確かこの人は、『東方妖々夢』の八雲紫では？）」
「えっとあなたは？」
「あら、まだ名前を言ってなかったわね。でも、人に名を尋ねる時は、自分から名乗るものよ？」
「そういえば、そうですね。俺は、明石佑也です。」
「三竹達也です。」
「折原優末っす。」
「霧原創です。」
「ご親切にどうも。私は、八雲紫ですわ。」
そういうと紫は、扇子で口元を隠して近ずいてきた。そして、一人一人の顔を触っていく。
「なるほど、あなた達面白い能力を持っているのね。」
「ふぇ？」
４人は、まったく状況が分からなかった。それと同時に、どんな能力なのか知りたくなった。
「ふふ。どんな能力か知りたいようね。じゃぁ、私と戦ってみましょう？」
「えぇ～！？いきなりですか！？」
「そうよ。じゃぁ、一人一人能力がはっきりしたら交代ね」

「は、はい」
「じゃぁ、まず明石からね」
「いきなり呼び捨て！？まぁいいけど。」

二人は、間をおいて向かいあっている。明石は、「どうしかけてくるんだろう？」と思っていた。すると。
「じゃぁ、いくわよ。」
「来い！！」
すると紫は、手に持った傘の先を向けてきた。するとそこから光輝く弾がものすごい量飛んでくる。
「（あぁ～終わったな～）」
と思い諦めかけたそのとき目の前の空気中に穴が開き光弾は、その中に入り消えた。
「あらあら。私の可愛い光弾が。まぁ、いいわ。今のがあなたの能力『空間を操る程度の能力』よ。」
「うぉ～！すげー俺！？」
「それにしても案外早く発動したわね。」
「じゃぁ次、三竹」

・・・

三竹と、折原の能力は、「重力を操る程度の能力」、「霊力を扱う程度の能力」&「兵器を創造する程度の能力」である。
そして、今紫は霧夜創と戦っている。そして紫は、少し困った顔をしている。
「う～ん。困ったわねー。ここまで、発動しないとは・・・」
「これは、スペルカードを使った方がいいのかも知れないわね。」
「え！？」
創がそういうと同時に紫は、スペルカード宣言をした。
「紫奥義『弾幕結界』」

すると結界を張るがごとく創を弾幕が取り囲んだ。そのとき、創は死を悟った。しかし、そのとき

「僕は、まだ生きたいんだ！！」

創がそう叫ぶと創の周りに光輝く楯が出現した。そして、その楯は四方八方から迫ってくる紫の弾幕をすべてかき消した。

「ようやく発動したわね。それがあなたの能力『妖力で盾を創造する程度の能力よ。」

そういう紫は、満足そうにしていた。

戦闘ですか、そうですか。（後書き）

どうでしたでしょうか？戦闘起こってませんねwすいません。早めに戦闘シーンも入れていきたいと思います。

え・・・マジですか？（前書き）

はい。このお話も始まってから４話目です。今回は、バトルシーンがありま・・・す（微妙に）。では、どうぞ。

え・・・マジですか？

あれから数刻後・・・俺達は、山道を歩いている。
『え？なぜかって？紫さんが着いて来て欲しい所があると言ったからなんだよ。』
「「「「おい？明石？誰に話しかけているんだ？」」」」
「え？いや・・・なんかどこからか突っ込みの声が聞こえたような気がしてさ～」
「「「「１００％空耳」」」」
「ちょ、ひどい紫さんまでw」
明石は、ネイティブなやつなのでこのくらいではへこたれない。
みんなで少しの間笑いあうと、紫が妙なことを聞いてきた。
「ところで、霧夜創？あなたは、女性なの？」
「「「「へ？」」」」
みんなで変な声を上げてしまう。創ときたら顔を赤くしている始末だ。
「「「な～に、言ってるんですか？紫さん」」」
「はわわわわわ・・・僕は、男ですよ！？」
創は、顔を真っ赤にして抗議している。しかし、紫は、
「そうなの！？いえ、男性にしては、髪が長いし、声質も女性に近いし、顔立ちも女性に似てたから言ってみたのよ。」
と言ってきた。
「「「確かに、霧夜って、女性にすごい似てるよな。」」」
「えぇ～！？みんなひどすぎる！？」
そんな会話をしていると紫が、
「さぁ、この階段を上った先よ。」
「「「「うん？」」」」
階段の上の方を見るとある場所で見かけるあれが見える。
「あれ？確か・・・なんだっけ？」

「鳥居でしょ？」
「おぉ～！さすが、折原！」
「いや、当たり前」
さすが、折原頭は、いいがキツイことを言ってくる。
「ほら、バカやってないで行くわよ。」
「「「「は～い」」」」
少年、隙間移動中・・・
「作者いつかシバくわよ」
「誰に言ってんだ？」
「いえ、別に」
今、俺たちの目の前には、神社が見えている。そして、巫女（？）さんが箒で掃除している。それに、魔法使い（？）が賽銭箱の上でニヤケている。そして、紫が、
「じゃぁ、紹介してくるわね。」
といって隙間の中に消えて行った。
「「「「え？ちょ・・・」」」」
紫は、すでに巫女（？）さんたちと話をしている。
それから、しばらく僕たちは、立ち尽くしていることしかできなかった。が、その巫女さんが、こっちに向かって歩いてくる。そして、
「あなた達、まぁ、幻想郷にいらっしゃい。でも、妖怪ということだから一回私に退治されなさい？」
「「「「えぇ～！？何この急展開！？」」」」
「ちなみに私は、博霊霊夢よ」
「私は、霧雨魔理沙だぜ」
「紫から、話は聞いてるからそっちは、４人でかかってきなさい。こっちは、１と『私も相手するぜ』・・・やっぱりそうなるわよね。」
霊夢は、ため息交じりにそう言う。魔理沙は、
「あたりまえだぜ？霊夢一人に妖怪退治をやられてたまるかだぜ。

」
とか言ってる。
「「「「「やらなきゃだめだよね？」」」」」
「「当たり前」」
「「「「「とほ～」」」」」
少年、少女戦闘準備中・・・
「じゃぁさっそく行くわよ！スペルカード！霊符『夢想封印』」
「私も行くぜ！スペルカード！魔符『スターダストレヴァリエ』」
霊夢からは、虹色に輝く光の玉が放たれ、魔理沙からは、ものすごい数の星（？）が放たれる。
「「「「「はぁ？なにこれ？チート？」」」」」
明石たちは、そう言い放つ。
「弾幕は、火力（パワー）だぜ」
と魔理沙は、言い放つ。しかし、明石たちも黙って弾幕は、受けない。まず、創が周りに盾を創造して霊夢の弾幕を防ぐ。そして、優末が大量のＭ４Ａ１を出現させ弾幕を張り、魔理沙の弾幕をかたっぱしから、消滅させる。そして、創が吸血鬼化して、飛び立ち上空に浮く。
「私のスペルが敗れた！？」
霊夢は、驚いている魔理沙は、
「くそ～。火力が足りなかったかだぜ」
そんなことを言っているが、二人は、次のスペルカードを発動させる。
「スペルカード！神霊『夢想封印　瞬』」
そういうと、霊夢からさっきと似たような光の玉が放たれる・・・が、さっきより数倍スピードが速く、まだ能力に慣れていない創の盾は、間に合わず・・・
ピチューン×３
そして、創が下に気を取られている間に魔理沙も、
「スペルカード！恋符『マスタースパーク』」

完全に警戒を怠っていた創は、気が付いた時には、遅く・・・・

ピチューン

こうして、明石たちの初戦は、敗北で終わったのだった。

え・・・マジですか？（後書き）

新たなプロフィールです。

霧夜　創

女性のような男性である。もしかしたら、本当に女性かもｗ

はい、もうストーリー滅茶苦茶ですね。ｏｒｚ

では～。

第一回東方懇談会！！（前書き）

東方サイコー
「さぁ、始めようか！」
佑也
「ところで作者？なんだ？これ？」
東方サイコー
「ちょ・・・おま・・・？多！！」
佑也
「モンダイナイ。」
東方サイコー　創
「ちょ、問題あｒ『は～い。さっさと始めようか？』ちょ、創！！顔は、笑ってるけど目が笑ってないぞ！？逆に怖え～よ。」
優末
「始まるよ」

第一回東方懇談会！！

東方サイコー
「さぁ、始まったＺＥ☆（キラーン）」
佑也
「ところで、これは、なんだ？あと、キラーンは、いらんぞ？」
東方サイコー
「あぁ～。これか。これは、主に僕のネタがない時の暇つぶｓ・・・もとい、ストーリーを理解できなかった人に少しでも理解してもらうための懇談会？的なものだ！」
全
「おぉ～！」
東方サイコー
「どうだ！すごいｄ『作者さんちょっといいかしら？』ふぁい？・・・っ！」
全員が見た先には、八雲　紫と、その下僕八雲　藍それに、紫の友達西行寺　幽々子、庭師の魂魄　妖夢までいる。なぜか、この４人は、キレているようだ。
紫
「よくも、前回の話で隙間とか、言ってくれたわね。」
藍
「紫様をバカにするやつは、許さんぞ？」
幽々子
「この人？メガネかけてるバカは？」
妖夢
「幽々子様、それは、さすがに言い過ぎです。」
グサ、グサ、グサ
紫たちの言葉によって作者の精神に３０００のダメージ。
東方サイコー

「なんだと～！！このＢＢＡ！ども～！妖夢は、別だが！」
プチ
作者は、どうやら紫たちの怒りを買ってしまったようです。
紫＆藍＆幽々子＆妖夢
「「「「覚悟できてるよね～！」」」」
東方サイコー
「（オワタ（＾ｏ＾））」

グロテスクなため書き表すことができません。

東方サイコー（血まみれ）
「すいませんでした。」
紫
「今度言ったら殺すわよ？」
藍
「消し炭にしましょうよ。」
幽々子
「うふふふ」
妖夢
「幽々子様にあんなこと言ったのですから、当然です。」
東方サイコー
「さぁ、気を取り直して行きましょう。」
全員
「立ち直り早！！」
東方サイコー
「今日は、ゲストに来てもらっていますよ。」
優末
「うん？ゲスト？聞いてないぞ？」
東方サイコー
「急遽だからな。」

創
「で、ゲストって誰なんだい？」
東方サイコー
「ふ、ふ、ふ、この人だ！」
ハジメ軍曹
「どうも」
全員
「作者のキャラだー！！」
ハジメ軍曹
「いや～。困ったよ。今日は、任務なのに、いきなり作者に頼まれてさ～。」
優末
「断ればよかったんじゃないのか？こんなKS作者の頼みなんて。」
ハジメ軍曹
「いや～。だってさ～・・・」
東方サイコー
「土下座したからな☆」
達也
「お前には、プライドは、ないのか？」
東方サイコー
「HAHAHAHAHAHAHA」
達也
「うざい。」
霊夢
「本題に戻るわよ」

第1話

佑也
「俺たちの紹介だな。」
達也
「なんか、俺たちの能力チートだな。」
東方サイコー
「まぁ、理科の前の時間に考え付いたのをそのまんまだしw」
創
「はぁ！？」
優末
「なんて、適当な。」
東方サイコー
「はい、次行こうか。」

第2話

佑也
「俺たちの幻想入りだな。」
達也
「あの展開は、滅茶苦茶だったな。」
ハジメ軍曹
「僕も読んでみたけど酷かったよ。」
東方サイコー
「ゲストは、少し黙ってろ！」
プチ
ハジメ軍曹（狂気状態）
「フゥ～ン。そんなに血まみれになりたいかい？」
東方サイコー
「ごめんなさい！」
魔理沙
「次だＺＥ☆」

第３話

佑也
「紫とのバトルだ。」
達也
「ヤバかった。」
紫
「あの方法が一番手っ取り早かったのよ。」
創
「あの、スペカは、ヤバかった。」
東方サイコー
「はい次。親がうざいんでな。ＨＡＨＡＨＡＨＨＡＨＡＨＡ」
ピチューン

第４話

佑也
「あれ作者は？」
霊夢
「親によって滅せられたわよ」
達也
「本当だ！『ピチューン』て、効果音がｗｗｗ」
佑也
「まぁいいや、続けよう。」
優末
「霊夢と魔理沙との戦いだな。」
創
「結果は、ぼろ負けだったけどね。」
霊夢

「でも、まさか、創が飛ぶなんてね。驚いたわ。」
創
「あのときの戦闘シーンでは、描かれてないけど。実際あの時、半分の方の吸血鬼になってたんだよ。」
魔理沙
「へぇ～。そうだったのかだぜ」
東方サイコー
「描けなかった・・・無念・・・グハ」
ハジメ軍曹
「作者がくたばったから、ここで終了。」
創
「ところで、ハジメ軍曹さんは、なにか宣伝したいことがあるみたいだけど？」
ハジメ軍曹
「そうそう。僕は、東方幽歌桜の方にも出るらしいぞ。よろしく！」
佑也
「出落ちお疲れ。」
ブッツン
ハジメ軍曹（狂気状態）
「喰らえや！スペルカード！幽符『一生終わらぬ弾幕迷路』」
ハジメ軍曹の弾幕によりスタジオが吹き飛んだので強制終了！
ハジメ軍曹
「これからも、どれもよろしく！！」

第一回東方懇談会！！（後書き）

東方サイコー

「返事がないただのしかばねのようだ」

佑也

「完全に昇天しとるw」

達也

「さっきの弾幕は死ねかと思った。」

優末

「ヤバかった。」

創

「これからもよろしくね」

新たなる問題発生！！（前書き）

誤字、脱字がありましたらご遠慮なくご指摘ください。

新たなる問題発生！！

「前回見事に負けたな。」
「なぁ、佑也？いったい誰に話してるんだ？」
「達也・・・それは、言わない約束だ。」
佑也と達也は、呑気にそんなことを言っているが優末と創は、ある問題に直面していた。

時は、戻って数刻前・・・博霊神社にて・・・

「まぁ・・・これでいいのか？」
「えぇ、一回退治されればそれでいいの。」
「「「「はぁ・・・。ならいいんですけど。では、僕たちは、これで。」」」」
霊夢＆魔理沙との戦いは、佑也達の圧倒的な敗北で幕を閉じた。
「そう。気を付けてね。」
霊夢は、めんどくさいような顔をしながらも、佑也達を見送った。

回想終了

そして、今、問題になっているのが・・・
「二人とも遊んでる場合じゃないよ。」
「「遊んでないけど・・・どういうこと？」」
「・・・はぁ～。問題があるじゃないか。」
すでに、創は飽きれていた。
「「どんな？」」
二人は、聞いてくる。

「これから僕たちは、ここ、幻想郷で暮らすわけになったけど・・・僕たちには家がないじゃないか。」
「「あぁ～！！確かにない！」
「「・・・はぁ～・・・」
優末と、創は飽きれていた。しかし、いつまでも、このような会話をしているだけでは、始まらないということで優末は、ある提案をした。
「とりあえず、『妖怪の山』というところに行ってみよう。妖怪の力も上がるらしいし、もしかしたら使われていない山小屋か何かあるかも。」
「「「う～ん。まぁ、このまま何もしないのは、時間の無駄だしね。行ってみよう。」

・・・少年移動中・・・

4人は、妖怪の山に到着した。しかし、当初の目的を忘れてしまうような出来事が起きていた。
まず、佑也だが『妖怪の山』に来た直後からいきなり
「力があふれ出すー！！」
といきなり叫びだし達也に殴り掛かり見事に後頭部を直撃した。もちろん、調子に乗った佑也はおふざけだったのだが、力が加算されているのでそれは、もはやおふざけレベルではなく。現在殴り合いが行われている。
優末は、珍しい植物などが多く生えているので完全に無言で研究を始めている。
創は、数多くの虫を嫌がり
「キィーヤー！！虫、虫、虫、虫！！」
と訳の分からない叫び声を上げながら走り回っている。
そんなところにある声が聞こえた。
「あやや。あなた方が、新しく幻想入りしてきた方々ですか？」

「「「え？」」」
優末以外の全員が声のした方に振り向く。ちなみに、優末は夢中になりすぎて気がついていないようだ。
「「「えっと・・・。あなたは？」
「どーも。文々。新聞の射命丸文（ぶんぶんまるしゃめいまるあや）と申します。取材よろしいですか？」
「「「え・・・。はい・・・。別にいいですけど。」」」
「ありがとうございます！では、さっそく・・・」

・・・少年取材中・・・

「どうも、ありがとうございました！」
「「「いえ。（長かった）」」」
そう、文による取材はとても長くすでに暗くなり始めている。
「では、私はk「ちょっと待ってくれ！」・・・はい？」
「この辺に誰も住んでない小屋とかない？」
創は、無駄だと期待もせずに聞いてみた。しかし、返ってきた答えは以外だった。
「ありますよ」
「「「えぇ～」」」
「案内しますから着いて来てください。」
「「「はい！あと・・・」」」
「「「お前は、いつまで研究してんだー！！」」」
その時、3人の蹴りが優末にクリーンヒットする。
「ぐわー！」

数刻後

「ここです。」
文が指差す方向には、少しボロクサイ小屋が立っていた。

「結構古臭いが・・・使えないことは、なさそうだな。」
「まぁ、どう使うかはあなた方次第ですよ。では、私は、新聞を発行するので失礼します。」
そう言った後、文は一瞬にして飛んで行ってしまった。
「まぁ、これで問題解決だな。」
「よし、さっそく掃除だー！」
創がそういう。なぜなら創は、汚い場所が嫌いだからだ。
「「「えぇ～！！」」」
３人は、疲れ切っていたからそう叫んだ。
こうして４人の幻想郷ライフが始まったのだった。

新たなる問題発生！！（後書き）

どうでしたでしょうか？ご感想、ご指導お待ちしております。

え・・・何このハプニング（前書き）

東方サイコー
「今回は、佑也と創の間でハプニングが起こります。」
佑也＆創
「「作者・・・一応聞くけど・・・どんな」
東方サイコー
「それは、本編でのオ・タ・ノ・シ・ミ」
佑也＆創
（嫌な予感しかしない）

調子に乗って2話連続投稿です。

え・・・何このハプニング

あの後、創指示の元小屋の中の大掃除が行われた。掃除したところ、小屋の割には多めの部屋があり、生活には支障はないようであった。その後、寝る部屋を決めようとしたが創を除く3人は疲れていたため

「「「今日は、ここで全員で寝ればいいんじゃね？」」」

と言い出した。もちろん創は、大反対

「無理！無理！無理！無理！無理！」

なんと無理！を5回も発音したのだった。しかし、3人から

「「「もう眠い・・・無理！」」」

と言った後寝てしまったのだ。仕方なく創も同じところに寝たのだが、それこそがハプニングの火種であった。

・・・翌朝・・・

佑也は、眠いながらも目を覚ました。

「う～ん。朝か。」

佑也は、起きようとしたが体が重くて起き上がれないでいた。

「なんだ？・・・へ？」

佑也の目の前には、女性のような寝顔をした創の顔があった。創は、もともと女性のような顔なので（声もだが）なので余計女性に見えてしまう。

「（創て、こんなに可愛かったっけ・・・おっと、僕は何考えてるんだ。創は、男じゃないか。）」

佑也は、頭の中ですべてを訂正してから創に

「おい。創起きろ！」

「ひゃ！」

創はよほど驚いたのか飛び起きた。そして、状況を判断したのか

顔を真っ赤にしながら佑也に
「ご、ご、ごめん。寝ぼけてそっち行ってたみたい。」
「別にいいけど、顔を赤くしていうことか？」
「ご、ごめん」
創は、そういって部屋を飛び出していった。佑也も今日みんなで決めていたことを思い出し着替えを始めた。
「今日からの能力を使いこなせるように修行しないとな。」
こうして佑也も外へと出て行った。

え・・・何このハプニング（後書き）

次回は、佑也達の修行になりますね。たぶんw

佑也＆創

「おい！作者！！」

東方サイコー

「うん？」

佑也＆創

「なんだこのハプニング！まるでエ〇ゲじゃねーか！！」

東方サイコー

「別に普通のアニメとかでもありがちな展開じゃん。それに、やったことねーし」

達也

「この童貞ロリコン！！」

東方サイコー

「達也どこでそんな言葉覚えた！？あと、ロリコンは、余分だ！！出番減らすぞ！！」

達也

「どーもすいません！」

優末

「次回もよろしく。」

佑也達の修行（前書き）

今回は、もうストーリーを無理やり展開させていきます。
後、前回書き忘れましたが、創は、男ですよ。女性ぽいのはキャラの仕様です。気にしないでください。また、オカマでもありません。

佑也達の修行

・・・妖怪の山　佑也達自宅付近・・・

「ごめん。遅れた。」
そう言って佑也が現れた。
「「遅せーぞ！！」」
そう言って達也と優末が言った。
「これから、修行を始めるぞ！とりあえず、一対一のガチでやるぞ。とりあえず、佑也と達也でやりあって、僕と創とで戦い、トーナメント方式で戦う。」
「「「はいよ」」」

・・・少年準備中・・・

まずは、佑也と達也との戦いである。力は、若干佑也の方が勝る。
「始め！」
優末がそういうと二人の戦い（修行）が始まった。また、夕べのうちに全員スペルカードを考えてあった。そして、そのスペルカードがついに宣言された。
「いくぞ！スペルカード！妖符『空間の境目』！！」
佑也が先にスペル宣言をし少し弾幕を放つ。達也は、囲まれ横に動けない。
「どうした？これだけか？」
達也は、挑発してみた。すると、佑也から大量の弾幕が放たれいくつかはそのまま達也に向かってきたがほとんどが佑也の作った空間によって達也の目の前に送られるのだ。達也もさすがによけきれなくなりスペルカード宣言をした。

「スペルカード！重符『重力の谷間』！！」
達也がスペル宣言をすると達也の弾幕はすべて重力が重くなったので地面に当たり消えていく。また、達也から大量の弾幕も放たれる。また、弾幕の重力は軽くしてあるので高速で佑也に向かって飛んでいく。
数十分が経過したころに、佑也の勝利で終わった。

次は、優末と創の戦いである。力的にはほぼ互角である。
始まった後数分の沈黙が流れた。なぜなら、両方で先手をかけるタイミングをうかがっていたからであった。
そして、ついに優末が先手を仕掛けた。
「スペルカード！銃符『全放火一斉射撃』！！」
優末は、スペルカード宣言をするとアサルトライフルである『M４A１』×２と『XM８』×２を出現させ、さらに「RPG７」までもを出現させ、合計５つもの火器が創を一斉に襲う（もちろんゴム弾とエアガンタイプ）創も負けずにスペルカード宣言をした。
「やばい！・・・スペルカード！防符『盾が防ぎ弓が攻撃』！！」
まるで、ネーミングセンスがないのか？と、疑いたくなる名前だが、結構強力で能力で生み出した盾が火器の攻撃をすべてシャットダウン。そして、創はどこで手に入れたのか分からない弓を持っていた。その弓からありえないほどの弾幕が弓矢のごとく優末にふりそそいだ。
開始から数分でこの戦いは創の圧勝で終わった。

佑也達の修行（後書き）

次回で佑也と創を戦わせたいと思います。やばい戦闘描写が難いw
これからも、不定期更新でがんばっていきます。

ちょっとした予定変更（前書き）

佑也
「作者？これはいったい？」
東方サイコー
「内容はしたの方で話すよ。」
ちょっとした予定変更です。

ちょっとした予定変更

東方サイコー
「ちょっとした予定変更です。」
佑也
「本当にちょっとしたなのか？」
東方サイコー
「もしかしたら、ものすごい予定変更かも知れない。」
全員
「・・・その内容は？」
東方サイコー
「実を言うと飽きてしまった。」
全員
「ほう。自分から死亡フラグを立てるとはいい度胸だ」
東方サイコー
「嘘だよ。」
霊夢
「じゃぁ、本当のことを言いなさいよ！」
東方サイコー
「実を言うとこのストーリーは、最初は、４人が平和的に幻想郷に住んで異変を起こして終了にするつもりだったんだけど・・・」
紫
「とてもいいストーリーだと思うわよ？」
東方サイコー
「うん。だけど、それだと異変までの間暇だろ？特にこの小説を読んでくれている人が。」
全員
「ありえる。」
東方サイコー

「だから、もう何話か執筆したら、『このストーリーは、ある大異変の序章でしかなかったのだ・・・』的な感じで締めくくって本当の方を書こうと思う。」
幽々子
「どういう感じの？題名は、決まってるの？」
妖夢
「幽々子さま・・・。それはネタばれというものですよ？
幽々子
「だって気になるじゃない？」
妖夢
「それは、そうですけども・・・」
東方サイコー
「すでに題名は、決まってる。ストーリーも大体決まってるよ。」
全員
「その題名は？」
東方サイコー
「今は、ネタばれになるから教えられない。もう一度最後に開くからそのときを待ってください。」
全員
「まぁ、なら」
東方サイコー
「まぁ、キャラを変えたりということはないから佑也達も安心しろ。」
佑也＆達也＆優末＆創
「「「「了解」」」」
東方サイコー
「じゃぁこの辺で終わりだ。」

ちょっとした予定変更（後書き）

今回の話は、本当のことです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7597w/

東方怪奇談

2011年10月22日01時10分発行